広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ペルシア語の文法書・辞書・研究書について
Author(s)	縄田, 鉄男
Citation	ニダバ , 2 : 73 - 81
Issue Date	1973-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044694
Right	
Relation	

入門講座

ペルシア語の文法書・辞書・研究書について

縄田鉄男

序

ペルシア語は印欧語族のイラン語派に属する言語であり、歴史的に見れば、サーサーン朝の中世ペルシア語、さらにアケメネス朝の古代ペルシア語に遡り得、約２７００年の歴史を有するイラン語派中最大の威信を享受している言語である。普通ペルシア語といえば、７世紀中葉サーサーン朝がアラブ軍に敗北せられ、その後次第にペルシアがイスラム化し、中世ペルシア語を書き表わしていたパフラヴィー文字にかわってアラビア文字が採用され、多数のアラビア語彙が取り入れられて成立した言語をさす。現在ではイラン、アフガニスタン、タジック共和国で用いられている。イランの人口22,860,000（1964年）、アフガニスタン15.000.000、タジック・ソヴェート社会主義共和国1,982,000の人口を有し、Linguistic Census が無いので正確な話し手の数は摑めないが、The World Almanac 1969年によれば2,200万人である。

以下に於いては専門的な研究書、論文は出来るだけ省いて、実用的な辞典、学習書の内から現在入手可能なものを中心に記することにしよう。因に、我が国でも代表的な文学作品のいくつかは、既に日本語に翻訳されているが、残念ながら文法書、辞書は未だ出版されておらず、初歩的知識も西欧諸国で出版されたものに頼らざるをえない。そこでここでは我が国の現状をも考慮に入れて、出来るだけ、英、独、仏の諸語で書かれたものを主に述べることにしよう。

初学者が、ペルシア語の概略を把握するには、Levy, R.：The Persian Language. London：Hutchinson, 1951. 125p. が良い。そこには語史、歴史、地理、宗教、文学等の略述、概説が見られるであろう。さらに、Bailey, H. W. "The Persian Language", The Legacy of Persian.

Edited by Arthur J. Arberry. New York：Oxford University Press, 1952, PP. 174−98。 イラン語派中のペルシア語の位置、歴史などを知るに適している。

【A】 文法書

ヨーロッパに於いては De Dieu の Rudimenta linguae persicae, 1639,

J. Greavius の Elementa Linguae Persicae, 1649, William Jones の A Grammar of the Persian Language, 1771. 等可成に古くから入門文法書が出版されている。

(1) Rosen, F. :Modern Persian Colloquial Grammar. London, 1898.

(2) Clair-Tisdall, W. :Modern Persian Conversation-Grammar. Heidelberg: Method Gaspey-Otto-Saver, 1923.

(3) Beck, S. :Neupersische konversationsgrammatik mit besonderer Berücksichtung der modernen Schriftsprache, 2 Bände. Heidelberg, Method Gaspey-Otto-Saver, 1914.

(4) Elwell-Sutton, L. P. :Colloquial Persian. London:Routledge & Kegan Paul Ltd. Seventh Impression, 1965. viii, 140p.

(5) Hinz, Walter: Persisch. Berlin: Walter De Gruyter Co. 1964. ix, 279p.

(6) Monteil, Vincent: Le Persan contemporain. Paris: Librairie C. Kliencksieck, 1955. 163p.

(7) Hawker, C. L. :Simple Colloquial Persian. London:Longmans, Green .and Co Ltd. Reprinted 1969.

(8) Lambton, A. K. S. :Persian Grammar. Cambridge U. P., 1953. xxiv, 275p.

(9) Elwell-Sutton, L. P. :Elementary Persian Grammar. Cambridge U. P., 1963. x, 233p.

(10) Hawker, E. M. N. :Written and Spoken Persian. London:Longmans, Green and Co. Ltd. Sixth Impression 1960. vii, 204p.

(11) Boyle, J. A. :A Grammar of modern Persian. (Porta linguarum orientalium, neue Serie, 9) Wiesbaden:Otto Harrassowitz, 1966. 111p.

(12) Mace, John : Teach Yourself Modern Persian. London : The English Universities Press Limited, 1962.

(1)〜(7)は、特に会話を中心としたもので最も手ごろなのは(4)と(5)であろう。(6)には、その第一部にテキスト、二部は語彙集でペルシア語、フランス語の部と分類語彙集に分かれている。

(8)〜(12)では(8)が最も良く、信頼がおける。初版以来版を重ね、Student'S Edition も出て

おり、姉妹書として、Persian Vocabulary. Cambridge U. P. 1954. がある。(8)(9)にはそれぞれ、同じ著者による。

Key to Persian Grammar With Additional Exercises 1967. 64p.

Key to Elementary Persian Grammar. 1966. 20p.

が有り、C. U. Pから出版されている。

初学者が、つまずくのは主として、ペルシア語を表記するアラビア文字であるが、(9)の文法書はこの点に関して、懇切丁寧であり、独習者にも適している。この書をおえてから、(8)の文法書に進むならば良いであろう。

さらに詳しい文法書としては次のものがある。

(13) Saleman, Carl und Valentin Shukovski: Persische Grammatik mit Chrestomathie und Glossar. Dritte Auflage Abdruck der Ausgabe von 1889. Leipzig:Otto Harrassowitz, 1940.

(14) Platts, J. and G. S. A. Rankin: A Grammar of the Persian Language。 Oxford, 1911.

(15) Lazard, Gilbert: Grammaire du Persan Contemporain. Paris: Klincksieck, 1957。

(16) Lazard, Gilbert: La langue des plus anciens monuments de la prose persane. Paris:Klincksieck, 1963.

(17) Jensen, H. :Neupersische Grammatik mit Berücksichtigung der historischen Entwicklung. Heidelberg:Carl Winter, 1931.

(16)は高度の学術書で、一般文法入門書とは云えないが、10世紀から12世紀に至る古典散文学に関する研究書で、テキストの解題関係書誌、参考書等の記述があり大変便利である。ペルシア古典文学やペルシア語学を専攻する者にとってはきわめて貴重で、座右におくと良い。(17)は歴史文法である。

【B】 文 学 史

簡便で、古代から現代までの文学をあつかったものは、

(1) Levy, Reuben:Persian Literature. London:Oxford university Press. 1923. Reprinted 1955 である。

これは、C. T. Onions を監修者とするLanguage & Literature Series の一冊である。

最もexhaustiveなものは

(2) Brown, E. G: A Literary History of Persia. London:Cambridge University Press. 4 vols. である。

これは可成り版を重ねており、Vol. I〜IIIは1964、Vol. IVは1969年の版が最新のものである。全巻で古代より1924年までをあつかい、頁数にして2千数百ある。

その他、次の二冊を挙げておこう。

(3) Kamshad, H.: Modern Persian Prose Literature. London: Cambridge University Press. 1966.

(4) Arberry, A. J.:Classical Persian Literature. London:George Allen & Unwin Ltd.

【C】 辞　書

ペルシア語辞典の編纂の歴史は古く、最古のものとして、AsadiによるLughat-i Fursがある。これは語尾をアルファベット順に配列したものであって、他の辞典とはその趣を異にする。11世紀のものである。その他17世紀のBurhân-i Qâti', Farhang-i Rašidi. などあり、テヘランでも出版されている。

まず最初に古典を読むための辞典について説明しよう。

(1) Vullers, J. A.:Lexicon Persico-Latinum Etymologicum. Bonn. 1855-67. 2vols. これは古典的名著ではあるが、第一にラテン語で書かれているので日本人には向かないであろう。1962年の復刻版が、Austria, Graz の Akademische Druck-u. Verlagsanstalt から出ている。

(2) Steingass, Francis Joseph:A Comprehensive Persian-English Dictionary. First Edition 1892. Fifth Impression 1963. 1539頁におよぶ浩瀚なもので、古典を学ばんとするものにとっては必要かくべからざるもので、今20世紀にもその価値を失わず、古典辞典としてこれを凌駕するものは未だ出版されていない。

なお、古典中の古典とも云ふべき、Firdawsi の Shāh-Nāma を読むためには、

(3) Wolff, Fritz:Glossar zu Firdosis Schahnama Hildesheim:George OLMS Verlagsbuchhandlung 1965. がある。

(4) Palmer, E. H. :A Concise Dictionary of the Persian Language. London:Routledge & Kegan Paul Ltd. 初版は1876年。1956年の第14刷がある。語彙も、熟語も少く今日では、あまり役に立たないであろう。

さて、現代語を読むための辞典にうつろう。まず、ペルシア・英語（波英）辞典から述べる。

(5) Haim, S:The Shorter Persian—English Dictionary 恐らく初学者に最も多く用いられるものであろう。その収録語数3万、熟語も可成り豊富である。これよりやや大きいのが、

(6) Haim, S.:The One—Volume Persian—English Dictionary である。

(7) Haim, S.:New Persian—English Dictionary. 2vols. 収録語彙も豊富。不可欠。

英・波辞典では

(8) Haim, S.:The Shorter English—Persian Dictionary.

(9) Haim, S.:The One—Volume English—Persian Dictionary.

(10) Haim, S.:The Larger English—Persian Dictionary. 2vols.

(5)〜(10)すべて、Téhéran:Librairie—Imprimerie Beroukhim より出版されている。

辞典というよりも少さく、語彙集とでも云うべきものに、

(11) Boyle, J.A。:A Practical Dictionary of the Persian Language. London:Luzac & Company, Ltd. 1949. 現代生活に必要な技術、社会制度、教育用語や、ペルシア・アカデミー(Farhangistan—i Iran)の Neologism も入っており、又発音がローマ字で示してあるので初学者に向いている。仏語、独語による辞典を次に挙げる。

(12) Petit Dictionaire Khayamm Persan Francais.

(13) Petit Dictionaire Khayamm Francais Persan.

(14) Nafisi, S. :Complete French—Persian Dictionary, 2vols。

(15) Farhad Sobhani:Persisch—deutsches Wörterbuch. xx, 254p. Berlin:Walter de Gruyter

(16) Gholam Ali Tarbiat:Farhange Tarbiat—Iranisch—Deutsches Wörterbuch. Téhéran:Bibliothek Ebne—Sina。 1959

(17) Gholam Ali Tarbiat:Deutsch—Persisches Wörterbuch. Téhéran:Bibliothek Ebne—Sina。

(18) Junker, Heinrich und Bozorg Alavi: Persisch—deutsches Wörterbuch. Leipzig: Verlag Enzyklopädie. 1965

【D】 読　本

(1) Larudee, Faze: Reading Persian. Ann Arbor:Ann Arbor Publishers, 1964

(2) Sobhani, Farhad: Persisches Lehr-und Lesebuch für die Umgangssprache. Berlin: Walter De Gruyter & Co. 1962.

(3) Kamshad, H.: A Modern Persian Prose Reader. London: Cambridge U. P. 1968

(4) Arberry, Arthur John: Modern Persian Reader. Cambridge U. P. 1951

【E】 概説書、翻訳書など

上記のReuben Levy: The Persian Language によってある程度の宗教、歴史、地理などの概要を知ることが出来るが、さらに2、3紹介することにする。

(1) Frye, Richard N.: Persia. London: George Allen & Unwin Ltd. 1968[2].

(2) Banani, Amin: The Modernization of Iran 1921-1941. California: Stanford University Press. 1961.

(3) Wilber, Donald N.: Iran-Past and Present. New Jersey: Princeton University Press. 1967[6].

(4) Ghirshman, R.: Iran. Penguin Books. 1954. Reprinted 1965.

(5) Frye, R. N.: The Heritage of Persia. A Mentor Book. The New American Library. 1963

(6) Grousset, Massignon et Massé: L'âme de l'Iran. Paris: Editions Albin Michel. 1951

ある言語を理解するには、単に音韻、文法語彙を学ぶだけでは充分でなく、その言語の話し手たちの宗教、社会、歴史、等々言語外的な文化に対して出来るだけ多くの知識を持つことが必要である。上記の著書はその意味で選択したものである。これらの著書には参考文献も挙げられているので、興味のある者はそれをたよりにより深く読むことが出来る。次に引用する、Gray, Foundations of Language (New York, 1926) の言葉を参照。

Knowing a language is much more than possessing a thorough acquaintance with its grammatical forms, or than being able to read or translate it perfectly, or than having an ability to speak it fluently according to the rules of its best authorities. (ibid. p. 105)

To possess true knowledge of a language is to feel it an integral part of oneself; it must not be 'foreign' in any sense. (ibid. p. 105)

Acquisition of a through knowledge of a language is not easy one must know not merely the linguistic side, but must also be acquainted with the entire history of the people who speak or spoke it. Migrations, conquests, commerce, occupations of every sort, geography, religion, law, intellectual level, and all associations and contacts with other peoples are reflected in language. (ibid, p. 129)

日本で出版されているものを2、3挙げる。文学作品では、

(7) 「薔薇園」サァディー著　浦生礼一訳

(8) 「王　書」フィルドウスィー　黒柳恒男訳

(9) 「ペルシア逸話集（カーブースの書、四つの講話）」　黒柳恒男訳

(7)(8)(9)共に平凡社出版の「東洋文庫」に収められている。歴史概論書としては次の2書を挙げておこう。

(10) 「イラン史」浦生礼一著　修道社

(11) 「イランの歴史と文化」　博文社

英訳でペルシア文学を読まれる人には、次のものが挙げられる。

(12) The Epic of the Kings Shah-nama--The national epic of Persia by Firdowsi. Translated by Reuben Levy. London: Routledge & Kegan Paul. 1967

(13) Persian Poem-An Anthology edited by A. J. Arberry. Everyman's Library No. 996.

(14) The Romance of the Rubáiyát. London:George Allen & Unwin Ltd. 1959

ペルシア語をこれから学習せんとする人もすでに一応の知識を得た人も、

(15) A. J. Arberry: Oriental Essays-Portraits of Seven Scholars-London:George Allen & Unwin Ltd. 1960 を読まれんことを希望する。

Simon Ockley, William Jones, Edward William Lane, Edward Henry Palmer, Edward Granville Browne, Reynold Alleyne Nicholson, A. J. Arberry の portraits はペルシア語、文学あるいはアラビア語、広くイスラム文化に対する一層の興味・関心を喚起させずにはおかないであろう。西南アジアの文化に対する我々＝一般に日本人はそうであろうが＝の関心は低く、知識も十分ではない様である（── たとえば、新井白石「西洋紀聞」にみられる知識と今日の一般知識人のそれとを比較されたい）から、そういう意味からも(15)は読んでおく方が良いと考える。

【F】 研究書、定期刊行物、学会誌

現今の研究事情、これまでの成果を知るには、

Current Trends in Linguistics (Edited by Thomas A. Sebeok) Mouton. 1970 vol. 6 の Part One:A:Iranian Languages, 同じくvol. 5 (1969) の Iranian Languages を参照のこと。

日本語で読めるイラン語派にもわたる概説は、

市河三喜：高津春繁共編「世界言語概説」上巻の「ペルシア語」八木亀太郎（研究社、昭和27年発行）及びブリタニカ国際大百科辞典2の「イラン諸言語」縄田鉄男訳（K. K ティービーエス・ブリタニカ発行、昭和47年6月）を見られたい。

日本にはイラン語だけの学会も雑誌もない様である。次に外国出版の雑誌を挙げる。

(1) Archiv Orientalni. Prague
(2) Bulletin of School of Oriental and African Studies. London
(3) The Central Asian Journal. London
(4) Indo-Iranian Journal. The Hague
(5) Journal of the American Oriental Society. New Haven
(6) Journal Asiatique. Paris
(7) Journal of Near Eastern Studies. Chicago
(8) Journal of the Royal Asiatic Society. London
(9) Middle Eastern Journal. Washington
(10) Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft. Leipzig

紙面の関係で、タージーク共和国のペルシア語（タジーク語）、アフガニスタンのペルシア語（ダ

リ語）については別の機会にゆずり、ペルシア語の研究に必要な古代ペルシア語、中世ペルシア語、又、アラビア語、トルコ語に関するものを一冊ずつ記すことにする。詳細は上述のC. T. Lにゆずる。また下記の著書の参考文献などを参照されたい。

Kent, R. G. :Old Persian. New Haven:American Oriental Society. 1950. xiii, 216p.

Nyberg, H. S: A Manual of Pahlavi, Part 1. Texts. Wiesbade: Otto Harrassowitz, 1964.

Reichelt, Hans:Awestisches Elementarbuch. Heidelberg:CArl Winter Universitätsverlag.

Zweite, Unveränderte Aufgabe 1967.

Wright, W. :A Grammar of the Arabic Language.

Vol 1. 1859 3rd edition 1896 Vol 11 1862 3rd edition 1898

Third edition revised by W. R. Smith and M. J. De Goeje. in one volume.

Cambridge University Press, 1967.

Lewis, G. 1. :Turkish Grammar. London:Oxford University Press. xxiv, 303p.

（昭和48年1月31日）